

誌上行学講習会

高佐日焯上人

「舌は専ら食味を主宰し直接生存欲の運営に掌する。」

「だんだん深くなって来ます。眼、耳、鼻まではさほど直接的ではありませんが、舌は直接的になって来るわけでありませぬ。」

「身は快感、不快感を区別し、性感覚を以て至高とする。」

身体は熱い、冷たい、かたい、やわらかいを知りま
す。気持が良いか悪いかを知る。その中で一番の感
覚は性感覚である。これは決しておかしいことでは
ない。これこそ神秘そのもので、これがあるが故に人
間は子孫を持つことが出来るのです。寿命本仏より
この最高の感覚を与えられている。働き疲れた人間
にその労のねぎらいとしてこの素晴らしき感覚をい
たゞいておる。有難いこと、感謝をしなければなら
ない筈であります。そこで身体についてですが、身
体こそは久遠の生命を今日に伝えていく唯一のもの
と言えるのであります。自分の身体は一体どこから
来たか。考えて行けばその源はたしかに寿命御本仏
に帰着するのであります。寿命仏から御先祖となり
そして父母となつて親から子へ、子から孫へとくまりの輪
のように今日についているわけです。ですから我々は自分を
知るとその源は地球上に生物が発生したときまで逆のぼらけ
ればならないのです。その数は計り知れない。とにかくその為
の絶対的条件は性殖行為にあるのであります。

決してみだらなことでなくあくまでも神聖にし
て神秘なものなのであります。したがってその感覚
だけを乱用することは断じていまいしめなければなり
ませぬ。

「これを生命運営の感覚と見るときは、従浅至深
の立体的に配列するのが妥当であり、眼、耳、鼻、
舌、身の順序が割切れるのである。」

三、五官は各独立せる知覚機能であるが、相関連
して主我の意欲に従うことは、各自の経験せる所で
ある。」

五官はそれぞれ別々ではあるけれどもお互いに関
係し合つて、主人公の我の為に働らいていてくれる
わけでありませぬ。

風呂へ入る時、先づフタを取る。湯気が出ている。
湯気が出ているからといってすぐ入れるかどうかは
わからない。手を入れてかきまわしてみる。あつ
かぬるいかをたしかめる。それから入る。ごちそう
等も、テーブルの上で並べられてあるのを見るだけ
では何にもならない。手にとり口に入れて舌で味わ
ってみなければ、うまいかまずいかを知ることが出
来ない。これらは五官はそれぞれ独立してはいるが
お互いにたすけ合つて行かねばならないことの証拠
であります。

(以下次号)